

週日の説教

金 大烈 神父 2010年10月27日(水)

《達は神様に愛されて幸せ、赦されて感謝》

主の平和

さあ、質問させていただきます。

皆様はご自分のことを考えて“幸せ”でしょうか。「幸せです！」(直ぐに反応がありました。)

そんなに簡単に答えないで下さい。(笑) どんなふうに“幸せ”がよく考えていただきたいのです。

“幸せ”でしょうか。「はい！」(笑)

何が“幸せ”でしょうか。「生きていること！」(誰かが答えました。)

「生きていること」は感謝。「生きていること」が苦痛の人もいるでしょうね。

さあ、何故このような質問をするか申し上げますと、結局、天国も、今私達が生きているこの状態の延長ではないかと私は思います。そして、大事なことは何によって“幸せ”を感じているか、それがとても大切なことだと思います。皆様が、感じているその“幸せ”が本物か、何も勿体らしくみせていることのない、本当に自分の中にある“幸せ”かを、ちょっと考えるべきではないかと思っています。

さあ、同じ言葉で皆様は今、“感謝”しているのでしょうか。実際に“感謝”という言葉は恵みです。これをわざわざしようとしても出来ないし、結局自分から自然に出るはずの言葉です。この反応が自然と自分から出ているかどうか。そして、何に対して“感謝”しているのか。これももっと深く黙想すべきものではないかと思っています。

何故このような話をするのか、すでに皆様ご存知だと思います。私達が^{まこと}真のことに“幸せ”を感じ、そして、それに“感謝”する心が出来れば、すでに私達の中では天国が体験されていることだと思います。これは痛みがあるかどうかの問題ではないでしょう。体が不便かどうかの問題ではないでしょう。お金があるかどうかの問題でもないでしょう。色々な苦痛、色々な避けたい事柄を身に受けてしまう問題ではないでしょう。

さあ、多方面において成功したと言われるある博士がいました。その人は他の人が持っている名誉とか、富とか殆どのものはすでに自分の手にありました。しかし、自分のことを考えてみたら、毎日一日も幸せな気持がしない。

「私は人々が求める全てのものを自分のものとして有るのに、何故幸福感を味わえないのか。」その気持がうつ鬱^{うつ}まで招いてしまいました。

結局その人は心理学者や、精神科の医者のところまで行きます。そして、自分のことをひとつひとつゆっくり説明します。「私はあらゆるものを持っています。全部自分の手に握っています。何かしようと思えば直ぐに出来ます。しかし、私は幸せではありません。どういうことでしょうか。」と聞きます。その話を全部聞いた先生は、よく考えて「私はあなたに4つの処方箋を出します。この紙袋の中

には番号を付けてある薬が4つ入っているので、それを処方箋として使って下さい。そして、明日の朝早く起きて、一番近い海辺まで行って下さい。」とすすめました。海辺に着いたら「3時間ごとにひとつの薬を飲みなさい。」と言われました。

その博士はすすめられたように、翌朝一番近くにある海辺まで行きました。浜辺で先生に出してもらった処方箋を開けてみると、やっぱり番号が付いていました。1番の袋をあけてみると、薬が入っているのではなくて先生からのメッセージでした。そこには「耳を傾けてください。」と書いてありました。それを読んだ博士は、砂の上に座って目を閉じて耳を傾けました。耳に集中していると、風の音、波の音が聞こえて来て、自分の心を落ち着かせるのを感じました。そのような状態で3時間が経ちました。

2番目の処方箋を開けてみると、「思い出」と書いてありました。その文字が目に入ったとたん、彼は昔のことを振り返り始めました。お父さんお母さんを100パーセント頼ったその心、純粋な幼い子供の時のなんの汚れもない気軽な心の分かち合い、友達とその友情、先生の影さえ追うことが出来なくて、先生の一言で震えたその心、そして妻と初めて出会って恋愛した時のどきどきしたその心、色々なことをひとつずつひとつずつ思い浮かべました。「ああ、そんな時代があったなあ」という気持ちでした。

そして3時間が経ってもうひとつの袋を開けてみました。そこには「初心に帰りなさい」とありました。「初めの心に帰る」彼はしばし考えました。純粋な青年時代、何故私は勉強しようとしたのか。色々な貧しい人々を救うために。何か病気にかかっている人の役に立つために。さまざまな理想的な夢を持って私は勉強をして今まで来たけれども、私が結婚した当時には、いい夫になろう、いい父親になろう、そういう心が結構あったはずなのに自分の成功を追いかけて、今まで全てを忘れて、失ってしまったことが多すぎると分かりました。

そういうことに心を痛めているうちにまた3時間が経ちました。そして最後の袋を開けてみました。そこには「あなたの痛み、心配を全部砂の上に書きなさい。」と書いてありました。ですから彼は思い浮かんでくる色々な心配や不安を指で砂の上に書き始めました。全部書き終えて、ぼんやりその字を眺めていると、大きな波が押し寄せてその字を全部消してしまいました。

さあ、これはハーバードの知恵という本で読んだ内容のものです。この物語にどんな意味があるのでしょうか。2つのメッセージがあると思います。私が今日、皆様に投げかけた「“幸せ”でしょうか。“感謝”の心で一杯でしょうか。」という質問の中には、本当に私は何を“幸せ”だと思っているのか、なにを“感謝”の心だと思うのか。それが皆様は、はっきり整理されなければならないと思いました。

人間は先ず色々ないい記憶があります。この胸を暖かくするいい記憶があります。今は皆様、ご夫婦で顔さえ見たくない時があるかも知れませんが（笑い）昔はお互いに震えた時があったでしょう。初恋もあったでしょう。今もヨンチャンかヨン様か分からないのですが、ごひいきの俳優に憧れている人もいるでしょう。誰でもそういう思い出があります。花を見て何も考えずに、その花の美しさに

見とれてしまうこともあるでしょう。そういうことが私達にはある意味で宝物です。もちろん傷もあります。悪い思い出もあります。しかし、人間の脳の働きの面白いのは、過去は美化されます。過去は出来るだけ美しく解釈しようとする自動的な働きがあります。それをいつも考えましょう。

これは過去にこだわって縛られるほうがいいという話ではありません。昔、自分の純粋だった心を思い出しましょうという話です。

美しかったその時代があった。母と手をつないで散歩したこともあるし、父母をありがたく思った日々もあった。お父さんがお土産を買ってくる夕方のその時間を待っていたその気持。皆様も在るでしょう。そういうことを私達の精神的な薬として持ちましょう。

もうひとつは「初心」初めの心。皆様が何かしようとしたその時の心をいつも意識しなければなりません。例えば私は日本に来る前に覚悟がありました。どのような覚悟で日本に来たのか、やっぱりそう簡単ではありませんでした。来てほしいと言われた時に決断も難しかった。しかし、決断してからはどのような姿で私は日本で司牧すればいいのか。「あなたの僕として生きます」という何かの覚悟があったのでしょうか。その覚悟を疲れた時、難しい事があった時、思い出さなければなりません。皆様も全く同じです。どうにも妻が嫌になった時、「私は一生この人のために僕になるような生き方をしよう。」と決心したのだったと思い出して下さい。そんなこと全部忘れているでしょう。(笑い)「初心」それを意識するのも私達が正しく歩む方法ではないかと思います。

さあ、今日の福音(ルカ 13・22-30)で目に留まったのは『入ろうとしても入れない人が多いのだ。』という箇所です。これはどういうことでしょうか。私はイエス様に関心がありません。カトリックの信仰に全然関心がありませんという人の話ではありません。入ろうとしている人とは結局私達のことです。私達信仰を持っている人々。「色々自分なりににはいいことしながら今までやってきた。」と思われる人の中でも、入られない人がいるという話です。信者は信者らしい生き方をしなくてはなりません。「信者という名」によってそれが救いの保障にはならないという言葉です。

皆様“幸せ”になりましょう。“感謝”の自分の人生を作りましょう。何の環境どんな条件の中においても、そうすれば私達はみ国に入られます。いつも文句、不安、憎しみ、傷このようなものに縛られてしまうとその時「ああ、お前、本当にご苦労でした。ここに来て休みなさい」と言われると思わないで下さい。何事があっても“感謝”の心、“幸せ”を感じられる心、その心があれば直ぐに神様の所へ行けると私は確信します。皆様一緒に行きましょう。50年後か40年後か1週間後か分からないのですが一緒に行きましょう。(笑い)

皆様も私も同じく先ず、神様から愛されています。それが“幸せ”のひとつの条件でしょう。そして、何故“感謝”するのか。それはいつも許されているから。この二つの心を忘れないようにしましょう。

ありがとうございました。